3

It was Christmas Eve.

The snow, which had been falling since the morning, still seemed to keep falling in the evening.

Amid the people rushing with their presents in hand, there was a little girl.

The girl was creeping along with a big paper bag.

She was shaking from cold since she didn’t have a hat or glove to wear.

“Would you like some matches? Please buy some…”

The girl kept talking to the people passing by.

Late at night, less people were seen on the street.

When the girl was walking around, she suddenly saw the light coming out from the window of a house.

Inside the house, a family was gathering around the table and having dinner happily.

There was a savory smell of freshly cooked roast chicken.

“Oh··· I’m hungry.”

The girl was looking inside the window for a while, but eventually started to walk again.

きょうは　クリスマス・イブ。

あさから　ふりつづく　ゆきは、
ゆうがたに　なっても、
やむ　けはいを　みせません。

プレゼントの　つつみを　かかえて、
かえりを　いそぐ　ひとびとの　なかに、
ひとりの　しょうじょがいました。
しょうじょは、おおきな　ふくろを　かかえながら、
とぼとぼと　あるいていました。
ぼうしも　てぶくろも　つけず、
さむさで　ふるえていました。

「マッチは　いりませんか。
だれか、マッチを　かってください・・」

しょうじょは、みちゆく　ひとに
こえを　かけつづけました。

よも　ふけて、
みちゆく　ひとも　すくなくなって　きました。

ふと　まちを　あるく　しょうじょの　めに、
とあるいえの　まどから　もれる　あかりが
とびこんできました。

いえのなかでは、テーブルの　まわりに
かぞくが　あつまり、
たのしそうに　しょくじを　していました。
やきたての　ローストチキンの、
おいしそうな　においが　してきました。

「ああ・・おなかがすいたなぁ・・」

しょうじょは、しばらく　そのようすを
ながめていましたが、
やがてまた　あるきはじめました。